人と環境 Vol. 1: 11 -13 (2008)

【評　論】

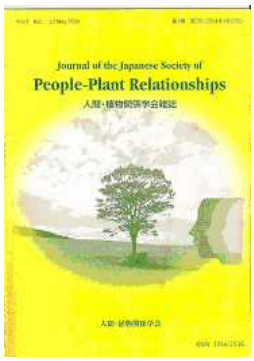
園芸療法の実践科学とエビデンスの狭間で
－園芸療法士の視点から－

寺田裕美子*

大阪信愛女学院短期大学

１．はじめに

つい先日、「第一回園芸療法学会」が東京大学にて開催された。これまで、園芸療法に関する学会が無かったわけではない。アメリカやイギリスからもたらされた園芸療法の理念はその多様さから、2001 年「人間・植物関係学会」として設立され日本全国の医療、福祉、教育、芸術、園芸、造園など様々な分野から園芸療法の可能性を探ってきた。（図１）やがて、園芸療法は治療を目的としてプログラムするもの、レクレーション的な利用に関しては園芸福祉と位置づけ他の国では見られない二分されるという状況に至った。園芸療法の資格制度も当初はアメリカやイギリスで習得するものから始まり、兵庫県が兵庫県立淡路景観園芸学校内に園芸療法課程を設立。兵庫県認定およびアメリカ園芸療法協会認定のダブル習得を可能とするカリキュラムが組まれた。しかし昨年、アメリカ園芸療法協会は今後、海外からの資格希望者を受け付けないことを発表した。日本のみならずアジア各地からの申請者が増加し、事務局が内容の確認など対応しきれなくなった、またアメリの園芸療法の整理及びステップアップをはかっていきたいとの理由からであった。現在、日本での園芸療法の資格制度は試験制度（2007 年度より開始）を伴う園芸療法学会が認定するもの、大学・短大実務協会が発行するもの、兵庫県が認定するもの、各地の研究会が発行するものと今尚多種にわたる。



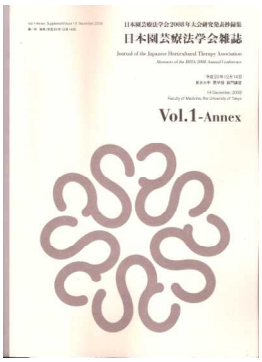


図１　人間・植物関係学会誌／日本園芸療法学会誌．

そうして今年、医療に認められる園芸療法を目指すため医療分野から理事長が立てられ「第一回園芸療法学会」が開催された。各地から数値化された評価発表が行われた。

そこには、十数年前、医療や福祉施設において病気であること、そこが病院であることも忘れたように本人も支援する者も植物の育ちやその実りに一様一旦する様子や、植物と人間の創作の世界にはすべての人を吸収し幅広いおおらかな関係性に、あらゆる希望がみなぎるように感じられた新鮮さはどこにも見られなかった。園芸療法の魅力とは何だったのだろうか？息詰った現代社会への反省や警告ではなかったのか？人間のケアの本質を新たな視点と価値感で問い直したいと立ち上がったのではなかったのか？職業地位を創りだすがあまりに身を縮め行き場を失いかけている様にうつる。振り出しに戻ってしまったような空しさを感じながら岐路に着いた。

もう一度現場で何が起こっているのか丁寧に見てみようと思う。

庭では様々なストーリーが生まれ出る。庭で起こる様々な人間模様を紹介していく。

Yumiko Terada:
Between the Practiceand Evidence of Horticultural Therapy.
Human and Environment Vol. 1 (2008)

* 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28　大阪信愛女学院短期大学, Tel:06-6180-1041 (笑福庭代表・園芸療法士)

受付：2008 年 12 月 19 日

©2008 大阪信愛女学院短期大学

２．出張園芸療法士

各地の医療や福祉施設へ出張してプログラムを行うタイプの園芸療法士は、毎日違う現場を点々と移動する生活スタイルが常となる。その度に必要な小道具が入ったカートを引いて持参しプログラムを行うこととなる。庭の手入れや植物の植え替えに必要なシャベルや移植ゴテなど基本的な道具は各施設で準備してもらうこととしている。土や肥料、鉢なども各施設で準備していただく。庭では多くの人が共有して手入れを楽しんだりして利用する為、道具の収納整理が重要になる。（図２）重度の知的障害や身体障害を持つ人も、誰もが自分自身で道具の出し入れから収納まで完結して行える事が望ましい。その理由は、クライアントの「自立を促す」「ADL を高める」ことだろうか？少し違和感が残る。庭で道具が必要になる時、人には何が起こっているのか。庭や植物を見て必要な手入れに気付き→「あースコップいるなー」といつもの場所に取りに行き→これこれと必要な道具に手を伸ばして手に入れ→植物の方まで戻り、自ら学んだ手入れ方法を行い→

図２　整理された農園芸道具置き場.

図３　自ら見つけて手をのばすという醍醐味.

図４　ビニールポットへの土入れ.

去年も確かこれで上手く育だったのだと振り返り→これからの育ちを期待し→汚れた道具を洗い→元あった道具置き場に戻す→ひと仕事終了。といった一連の所作は、気付き、回想、予測、期待、計画力、秩序など様々な自らの認知に従い自ら身体が動いている。（図３）他と共に過ごす場でクライアントの生きるエネルギーが放出され、よりリアルで総合的な社会対応力を見守りある中で経験していく。園芸療法士は、道具置き場の秩序を決め、クライアントの一連の所作が無事終わることを見守り、極力邪魔をしないように、もし途中、滞ってしまった場合はその原因を一緒に考え、新たな経験がクライアントに蓄積されたことを共有し、また次の気づきが始まることを見届ける。これが園芸療法士の支援への向かい方でもある。クライアントはゆっくりと、時に後退しながらこれらの所作が行われる。その作業が停止した場合は注意が必要である。目の前のテーブルにあるビニールポット、土、移植ゴテをじーっと見つめながらクライアントの手が止まった。「作業を見失っているのか」「この作業は経験が無かったのか」「発作が起こったのか」「隣の鉢が気になったのか」「長い息継ぎなのか・・・」・・・・あっ、スプーンん？！！ビニールポットに土を入れる場合、市販の移植ゴテでは大きすぎて扱いにくい場合がある。（図４）剪定鋏や樹名板、油性マジック、ビニール袋らと共に腰の作業袋にはいつも大中小のスプーンをしのば

せクライアントの所作を滑らかにサポートすべく園芸療法士はいつも持参している必要がある。

３．園芸療法－庭園美論

重度の知的障害クライアントの A さんは庭づくりがとても好きである。道具小屋から鍬を選び一輪車に乗せて庭に出てくる。適当な位置を見つけると手慣れた様子で畝を立て、庭のあちらこちらから花を茎から切り取り、出来上がった畝にきれいに列植し、あっと言う間に花畑が完成する。その自発性、充実した身体活動量、達成感からくる笑顔は満足感で満たされ輝かしい。（図５）一方花畑は翌日には、花の頭がうなだれ無残なものである。クライアント本人はその様子を見ても特に問題ない様子で、又新たなに開拓し畝に切り花が植えられていく。本人の主体性、達成感、満足感、適度な運動量の確保といった視点から見れば充分にその園芸療法的効果はうかがえるが花壇としての美観はない。これをどう捉えるのか。彼をサポートする施設支援員さんらの意見を聞くと賛否両論。
「あんなことしても意味がない。花をとってしまって・・・」「A さんが夢中になって楽しんでいる姿はそうそうあることでない。」「きれいな花壇をつくってくれるといいのだけれど」（図６）
園芸療法士としてはどう支援するのか。模索する中ふと造園事典に興味深い言葉を見つけた。

図５　耕す実感．

図６　花咲く美しい花壇．

【枝占（えだうら）】占木（うらき）、願木（がんぼく）ともいう。枝を地に挿し、それが根づくか否かによって願望が達せられるかどうかの判定とするもの。昔の名将、高僧が好んで行った方法とある。また、【枝挿伝説(えださしでんせつ)】昔の名将、高僧が地方に出て戦役で戦勝、伝道では布教達成の祈願を目的として枝を多くは逆に挿し、それが根付いて生育すれば目的成就、成功であると考えた、現在社寺等全国に相当例が多いとあった。

クライアントの中には、種を植えたり、土入れをしたり作業自体には興味を持って進められても、その結果として芽が出たり花が咲くことには何ら興味が無いというような様子が見られる場合がある。作業している実感そのものが心地よく響くようだ。A さんは施設での日常生活に取り立てて特に問題になる点はなく、園芸療法の目的と効果はクリアしているため、徐々に適した植物を提供しながら気長にやっていきたい心情である。美しい花壇好きの人が怪訝な様子で現れたら、「枝占がはじまりましたね。」と今は一緒に見守ることにする。

参考文献：上原敬二編　『造園大事典』加島書店（平成 11 年）

論文集「人と環境」Vol. 1 (2008)
大阪信愛環境総合研究所編集発行